

# 熊祭りの起源

春 成 秀 爾

- 
- |                |           |
|----------------|-----------|
| 1. はじめに        | 4. 豚から熊へ  |
| 2. オホーツク文化の熊祭り | 5. 熊祭りの起源 |
| 3. 日本の熊形造形品    |           |
- 

## 論文要旨

熊祭りは、20世紀にはヨーロッパからアジア、アメリカの極北から亜極北の森林地帯の狩猟民族の間に分布していた。それは、「森の主」、「森の王」としての熊を歓待して殺し、その霊を神の国に送り返すことによって、自然の恵みが豊かにもたらされるというモチーフをもち、広く分布しているにもかかわらず、その形式は著しい類似を示す。そこで人類学の研究者は、熊祭りは世界のどこかで一元的に発生し、そこから世界各地に伝播したという仮説を提出している。しかし、熊祭りの起源については、それぞれの地域の熊儀礼の痕跡を歴史的にたどることによって、はじめて追究可能となる。

熊儀礼の考古学的証拠は、熊をかたどった製品と、特別扱いした熊の骨である。熊を、石、粘土、骨でかたどった製品は、新石器時代から存在する。現在知られている資料は、シベリア西部のオビ川・イェニセイ川中流域、沿海州のアムール川下流域、日本の北海道・東北地方の3地域に集中している。それぞれの地域の造形品の年代は、西シベリアでは4,5千年前、沿海州でも4,5千年前、北日本では7,8千年前までさかのぼる。その形状は、3地域間では類似よりも差異が目につく。熊に対する信仰・儀礼が多元的に始まったことを示唆しているのであろう。

その一方、北海道のオホーツク海沿岸部で展開したオホーツク文化(4~9世紀)には、住居の奥に熊を主に、鹿、狸、アザラシ、オットセイなどの頭骨を積み上げて呪物とする習俗があった。それらの動物のうち熊については、仔熊を飼育し、熊儀礼をしたあと、その骨を保存したことがわかっている。これは、中国の遼寧、黄河中流域で始まり、北はアムール川流域からサハリン、南は東南アジア、オセアニアまで広まった豚を飼い、その頭骨や下顎骨を住居の内外に保存する習俗が、北海道のオホーツク文化において熊などの頭骨におきかわったものである。豚の頭骨や下顎骨を保存するのは、中国の古文獻によると、生者を死霊から護るためである。

オホーツク文化ではまた、サメの骨や鹿の角を用いて熊の小像を作っている。熊の飼育、熊の骨の保存、熊の小像は、後世のアイヌ族の熊送り(イヨマンテ)の構成要素と共通する。熊の造形品は、オホーツク文化に先行する北海道の続縄文文化(前2~7世紀)で盛んに作っていた。続縄文文化につづく擦文文化(7~11世紀)の担い手がアイヌ族の直系祖先である。彼らは、飼った熊を送るというオホーツク文化の特徴ある熊祭りの形式を採り入れ、自らの発展により、サハリンそしてアムール川下流域まで普及させたことになろう。

それに対して、西シベリアでは、狩った熊を送るという熊祭りの形式を発展させていた。そして、長期にわたる諸民族間の交流の間に、熊祭りはその分布範囲を広げる一方、そのモチーフは類似度を次第に増すにいたったのであろう。